

平安時代における假名字母の變遷について

築島 裕

一

平假名と片假名とは、共に、もと萬葉假名から發したものであつて、平安初期以來、文獻の上に現れるのであるが、その源となつたと考へられる萬葉假名の字母を調査して見ると、同じ平安時代の中でも、文獻の種類により、又時期によつて、若干の差異のあることが知られる。例へば、アの字母について見ると、訓點資料においては、九世紀から後の時代に至るまで、各時代を通じて、「阿」から出た字體が壓倒的多数を占めてをり、平安初期及び中期において、少數の資料に「安」から出たものが見られるに過ぎないが、これに對して、平假名資料を見ると、（それは十世紀以降現れるものであるが）十世紀頃のものは、「安」から出た「あ」の形が大部分で、その他では、緋色紙など僅なものに「阿」から出た形が見出されるに過ぎない。

所で、萬葉假名は、奈良時代に盛に用ゐられたことは言ふまでもないが、平安時代に入つて、平假名や片假名が創案されて以後も、依然として相當に廣い範圍に亘つて使用されてゐた。殊に、本文が漢文で書かれた文獻においては、その一部の語句について國語を表音的に表記しようとする場合、萬葉假名が漢文の本文の中に交ぜ用ゐられることが多かつた。その状態は、平安中期十世紀頃までは、例外なしに殆どすべての漢字文獻について行はれてゐたと見ることが出来る。所で、それらの萬葉假名を調べて見るに、アについては、「阿」「安」の両者が用ゐられてをり、唯、日本紀竟宴和歌では、「阿」「阿」の兩字が見出される。日本紀竟宴和歌に用ゐられた萬葉假名の字母は、アに限らず一般に、當時の他の文獻とは異なつた状態のやうに思はれる。

次に、イの假名について見ると、先づ訓點資料においては、「伊」「以」及び「已」を字母とするものが見えるが、

この中、大多數は「伊」を字母とする「イ、尹」などの字體であり、その他、平安中期に「以」を字母とする「以、𠂔、𠂕」などがあり、「己」を字母とするものに至つては、平安初期に僅に「己」の形が見出されるに過ぎない。一方、平假名資料においては、大部分が「以」を字母とする「𠂔」の形であつて、訓點資料に多用される「伊」を字母としたものは殆ど見出されず、例外的に秋萩帖に「以意」移の草體、繼色紙に「移」の草體が認められるに過ぎない。萬葉假名資料を見ると、「伊」「以」が併用されて全體の大部分を占め、例外として日本靈異記や日本感靈録の訓注に「移」が、日本紀竟宴和歌に「美」が見えてゐる。

以上は、大體十世紀末頃までの、各種の國語資料について、その一例を示したものであるが、このやうな状態は、ア、イ以外の假名についても多く見られるやうであつて、全體として、

- 一、訓點資料における假名と、平假名資料(假名文資料)における假名とは、共に萬葉假名に發してゐるけれども、その基となつた萬葉假名の字母は、必ずしも兩者同一であるとは限らないこと。

二、龍谷藏書院の萬葉假名資料の中の萬葉假名の字母は、同じ時代における訓點資料又は假名文資料の假名の字母と、必ずしも相重るものではないこと。

三、平安中期の書寫とされてゐる、秋萩帖、繼色紙など、所謂草假名文獻の假名の字母は、それ以前の平安初期の假名文文獻には見えない字母が、多く現れてゐること。

四、訓點資料では、時代が下るにつれて、字母も減少する傾向が見られるが、他種の文獻では、必ずしもそのやうには言へないこと。

五、日本紀竟宴和歌の字母は、他に例を見ない特異なものも多く含んでゐること。

などの事實が指摘されると思ふのである。以下、これらの諸點に注目しつつ、その事實を述べ、又、その國語史上における意義について、考へて見たいと思ふ。

二

次に、訓點資料の内部のみに注目して、平安初期九世紀から、平安中期十世紀を経て、平安後期十一世紀・院政期十二世紀に至る間に、所用の假名の字母について、

時代的な變遷が有るか否かについて、検討して見ることにする。しかし訓點資料の數量は非常に多く、そのすべてについて詳査を遂へてはゐないし、又、中には、假名の用例が少くて、資料として十分でないものも多い。それで、便宜上、従来までに私が調査し得たもの、先學同學の著書論文等によつて調査結果が公表されてゐるものの中から、

平安初期（九世紀） 三十七種

平安中期（十世紀） 三十七種

平安後期（十一世紀）前半 二十三種

を選び、合計九十七種について、その仮名を調査した。次に、漢文の書の章末、文中、紙背などに注記された訓注・訓釋等と呼ばれる一類のものを取上げた。訓點との交流に関して、近時論ぜられることが多いが、漢字漢語の和語注記といふ点では共通するが、表記記載方式の上で差異が認められるから、一往別個の一類として立てた。

次に、漢文の典籍の中に含まれてゐる萬葉假名としては、石山寺藏本大般若經音義（信行撰）と考へられるもの、皇太神宮儀式帳（神宮文庫藏本）等、十一種の文獻と

取上げたが、それらの中で、新撰萬葉集と日本紀竟宴和歌との二つは、特異な字母を含むものとして、注意して取扱ふこととした。

續いて又、平假名（假名文）文獻は、九世紀末の有年申文以下十一世紀の初頭にかけて、書狀・和歌など、當時の書寫本、又は信賴出來る轉寫本として現存し、學界に知られてゐるものすべて十五種を取上げた。但しこの中で、藤原行成書狀と傳へられるものは、字母の面で、他と異なる點が著しいので、注意して取扱ふこととした。又、古筆切の類は、多く年代が不明確であり、又、筆者の名前も確でないものが多いので、取敢へず、その初期と見られてゐるものの中、傳紀貫之筆の、高野切と寸松庵色紙とを、その代表として取上げて見ることにした。又、草假名の文獻として知られてゐる、秋萩帖（秋萩歌卷一）と繼色紙とを取上げ、共に平安中期十世紀乃至は十一世紀初頭に置いて検討して見ることにした。

これらの文獻名とその要目について記したのが「第1表」である。原本調査によつて私が纏めたもの、寫眞複製本に據つたもの、他の研究者の方々の發表されたものに據つたものなどの別を、個々に注記すべきであるが、

〔第1表〕資料文獻一覽(訓點資料の書名の下の略號は

ヲト點の種類を示し、①―第一群點、②―第二群點、③―第三群點、④―西墓點、⑤―喜多院點、⑥

―東大寺三論宗點、⑦―中院僧正點、⑧―乙點圖、⑨

―叡山點、⑩―寶幢院點、⑪―順曉和尚點、⑫―

特殊點、⑬―假名點)

○訓點資料・平安初期九世紀

1. 根本説一切有部毗奈耶・苾芻尼毗奈耶 七卷 聖語

藏 ⑭

2. 佛説央掘魔羅經 三卷 聖語藏 ⑮

3. 梵網經 一卷 醍醐寺 白點・朱點 ⑯

4. 沙門勝道歷山瑩玄珠碑 一卷 神護寺 ⑰

5. 金光明最勝王經 十卷 西大寺 最古白點數種

6. 妙法蓮華經 八卷 新藥師寺 ⑱

7. 佛説羅摩伽經 一卷 聖語藏 ⑲

8. 大乘阿毘達磨雜集論 四卷 聖語藏 ⑳

9. 願經四分律 十八卷 聖語藏・小川廣巳氏・岩淵悦

太郎氏 ㉑①③

10. 金光明最勝王經 十卷 西大寺 ㉒

11. 東大寺諷誦文稿 一卷 ㉓

12. 彌勒上生經贊 一卷 箕面学園 朱點 ㉔

13. 成実論 十一卷 聖語藏・東大寺圖書館 天長五年

828点 ㉕

14. 金光明最勝王經註釈(飯室切) 諸家 ㉖

15. 妙法蓮華經方便品 一卷 ㉗

16. 唯摩經義疏 一卷 法隆寺 ㉘

17. 大東掌珍論 一卷 根津美術館 承和元年834点 ㉙

18. 大東廣百論釋論 一卷 大東急記念文庫 承和八年

841点 ㉚

19. 百論 一卷 大東急記念文庫 天安二年858点 ㉛

20. 大智度論 石山寺他 天安二年858点 ㉜

21. 金剛般若經讚述 一卷 聖語藏 嘉祥四年851点 ㉝

22. 華嚴經 天理図書館、五島美術館他 元慶元年877点

㉞

23. 金剛波若經集驗記 二卷 石山寺・天理図書館 ㉟

24. 大唐三藏玄奘法師表啓 一卷 知恩院 ㊱

25. 地藏十輪經 七卷 聖語藏・東大寺圖書館 元慶七

年877点 ㊲

26. 妙法蓮華經化城喻品 一卷 京都國立博物館 ㊳

27. 彌勒上生經贊 一卷 箕面学園 白点 ㊴(12と同卷)

- 28. 四分律行事鈔 一卷 松田福一郎氏 ④
- 29. 金光明最勝王經註釋(奈良本) 三卷 聖語藏、東大寺圖書館 ④
- 30. 妙法蓮華經優婆塞論 一卷 聖語藏 ④
- 31. 瑜伽師地論卷第十八 一卷 知恩院 ④
- 32. 華嚴經卷第二十一、二十八 石山寺 ④
- 33. 大智度論 四卷 聖語藏 ①
- 34. 金剛般若經讚述 一卷 東大寺圖書館 仁和元年885
点 ①
- 35. 弁中辺論 三帖 石山寺 朱点 ①
- 36. 大般涅槃經卷第十一 白鶴美術館 ①
- 37. 同 卷第十二、二十 同 ①
- 訓点資料・平安中期十世紀
- 38. 蘇悉地羯羅經略疏 二卷 京都大学 寛平八年826点
②(可移点)
- 39. 周易抄 一卷 東山御文庫 寛平九年827頃点 ②
- 40. 胎藏秘密略大軌・胎藏略述 二卷 東寺 寛平頃 ②
- 41. 息災護摩次第 一卷 石山寺 承平七年937点 ②
- 42. 金剛頂三摩地法 一卷 筑波大学 天曆三年949年 ②

- 43. 沙弥威儀經 一帖 石山寺 ②
- 44. 守護國界主陀羅尼經 七卷 石山寺 ②
- 45. 蘇悉地羯羅供養法 二卷 石山寺 延長三年925点 ④
- 46. 弁中辺論 三帖 石山寺 延長八年930点 ④
- 47. 妙法蓮華經玄贊 二卷 石山寺・中田祝夫氏
淳祐点 ④
- 48. 蘇悉地羯羅經略疏 三卷 石山寺 天曆頃 ④
- 49. 仁王經咒願文 一卷 石山寺 ④
- 50. 百法顯幽抄 一卷 東大寺圖書館 延長頃 ①
- 51. 成唯識論述記 一卷 興福寺 延長六年928点 ③
- 52. 辯中辺論 一卷 聖語藏 天曆八年954点 ③
- 53. 唯摩詰經 一卷 大東急記念文庫 ③
- 54. 梵網經 一卷 五島美術館 ③
- 55. 大東掌珍論 一卷 小川広巳氏 天曆九年955点 ③
- 56. 沙門玄奘上表記 一卷 小泉策太郎氏 ③
- 57. 大毗盧遮那經 六卷 国会図書館 朱点 ③
- 58. 大唐西域記卷第十二 一卷 興聖寺 ④
- 59. 入楞伽經 五卷 知恩院 ④
- 60. 金剛界大法念誦次第 一卷 醍醐寺 ①
- 61. 大日經隨行儀軌 一卷 宝壽院 天曆二年948 ①

62. 大聖妙吉祥菩薩教令法輪 一帖 石山寺 天曆四年

950点 (西)

63. 求聞持法 一卷 石山寺 應和二年964点 (五)

64. 地藏十輪經 一卷 知恩院 白点 (五)

65. 古文尚書 一卷 東洋文庫 (五)

66. 毛詩 一卷 東洋文庫 (五)

67. 蒙求 一卷 保阪潤治氏旧藏 朱点 (五)

68. 漢書楊雄傳 一卷 上野淳一氏 天曆二年948点 (五)

69. 漢書高帝紀 一卷 石山寺 (五) (據大坪博士朱墨自傳)

70. 漢書周勃傳 一卷 大明王院 (五)

71. 世說新書 一卷 神田喜一郎氏 (五)

72. 日本書紀(推古紀・皇極紀) 二卷 東洋文庫 (五)

73. 蘇悉地羯羅經 一卷 京都大学 延喜九年909 (西)

74. 金剛界儀軌 一帖 大東急記念文庫 永延七年987点 (西)

○訓点資料・平安後期十一世紀

75. 成唯識論卷第五 一卷 桂泰藏氏 安和元年968点 (中)

76. 妙法蓮華經釈文 三帖 醍醐寺 傳真興点 (喜)

77. 法華義疏 八卷 石山寺 黄茶点 (五)

78. 同 長保四年1002点 (特) (目の変形)

79. 同 白点 禅林寺点

80. 十二天法 一帖 高山寺 (六)

81. 金剛頂蓮華部心念誦儀軌 一帖 曼珠院 寛弘七年

1010点 (六)

82. 金剛界儀軌 一帖 大東急記念文庫 長保五年1003点 (西)

83. 成唯識論 十卷(十帖) 石山寺 寛仁四年1020点 (東)

84. 大般涅槃經 四十卷 東大寺圖書館 (東)

85. 大日經 六卷 國立國會圖書館 白点 治安二年1022点 (七)

86. 成唯識論卷第十 興福寺 治安三年1023点 (七)

87. 大日經義釋 十九帖 東大國語研究室 治安四年1024点 (西)

88. 聖無動尊大威怒王念誦儀軌 一卷 東寺 萬壽三年

1025点 (西)

89. 建立曼荼羅護摩儀軌 一帖 持明院 長曆四年1040点 (西)

90. 護摩密記 一帖 西大寺 長元八年1035点 (宝)

91. 千手儀軌 一帖 石山寺 寛徳二年1045点 (宝)

92. 金剛頂經觀自在王如來修行法 一卷 曼珠院 永承
元年 1046 點 ○

93. 大日經卷第七 一卷 石山寺 長曆四年 1040 點 ㊦

94. 不空羅索神咒心經 一卷 興福寺 寬德二年 1045 點 ㊦

95. 妙法蓮華經 七卷 龍光院 明算點 (天喜 1053 / 1058 頃 點 ㊦)

96. 大日經成就法 三卷 石山寺 長久二年 1041 點 ㊦
(東大寺三論宗點ノ系列カ)

97. 大日經卷第一 一卷 五島美術館 長曆四年 1040 點 ㊦

○訓注類

101. 日本靈異記 (興福寺本)

102. 同 (前田本)

103. 同 (真福寺本)

104. 日本感靈錄 (龍門文庫本)

105. 周易抄 (東山御文庫藏、割注の部のサ)

106. 法華義疏卷第十二裏書 (東大寺圖書館藏本)

○漢文典籍中に萬葉假名を含む文獻

107. 大般若經音義卷中 (信行) 石山寺本、來迎院本

108. 善珠撰書類 (圖書寮本類聚名義抄所引)

109. 一字頂輪王儀軌音義 (傳空海) 高山寺 承元二年寫本

110. 皇大神宮儀式帳 (神宮文庫本)

111. 古語拾遺 (嘉祿本)

112. 日本後紀 (本文) (新訂增補國史大系本)

113. 同 (割書) (同)

114. 日本三代實錄 (割書) (同)

115. 新撰字鏡 十二卷 (天治本)

116. 本草和名 二卷 (日本古典全集本)

117. 和名類聚抄 二十卷 (内五卷、高山寺本)

118. 医心方卷第一 一卷 (仁和寺本)

119. 新撰萬葉集 二卷 寬文九年版本

120. 日本紀竟宴和歌 二卷 (本妙寺本)

○平假名文文獻

121. 讚岐國戶籍帳端書 (有年申文) 東京國立博物館 貞
觀九年 877

122. 千手觀音像臂内檜扇橋落書 東寺 元慶元年 877

才	衣	ウ	イ	ア	文 献 名
			伊 似	阿	1 根本説一切有部戒 奈耶苾芻尼戒奈耶
			字	イ 阿	2 佛説央抵魔羅經
			伊		3 梵 網 經
お		子	い	安	4 沙門勝道歴山法師
お	依 衣	お ウ	い イ	あ	5 金光明最勝王經 <small>(重)</small>
於		有	伊	阿	6 妙法蓮華經 <small>(難辨)</small>
		字		阿	7 佛説羅摩伽經
於	う	有 ぬ	伊 己	阿	8 大東阿毘達磨雜論
於	衣	字 字	尹	ア	9 願 經 四 分 律
お	う	子	尹	ア	10 金光明最勝王經
才	衣	子	尹	ア	11 東大寺諷誦文稿
と	う	字 字	尹	ア	12 彌勒上生經贊 <small>(朱点)</small>
と	う	子	尹	ア	13 成實論 828
才	う		尹	ア	14 金光明最勝王經註 釈 <small>(飯室切)</small>
才		ぬ	尹	ア	15 妙法蓮華經方便品
才					16 唯摩經義疏
お	う	子 子	尹 ヨ	ア 、	17 大東掌珍論834
		う	子	尹	18 大東廣百論軟論例
お		子	イ	ア	19 百 論 858
と	衣	子		ア	20 大智度論 858
		ぬ	ア	ア	21 金剛般若經讚述
				あ	22 華嚴經 879
才	衣	字 字	尹	ア	23 金剛波若經集驗記
才	衣	有 九	尹	ア	24 大唐藏玄奘法師表啓
あ	衣	ぬ 山	伊 尹	ア ア	25 地藏十輪經883

- 〔第2表〕 各種文獻所用假名字體一覽表
131. 御堂閑白記所載和歌及假名文 道長自筆寛弘元1001年
132. 因明義斷略記紙背和歌 寛弘七年 1010
133. 延喜式紙背書狀 東京國立博物館 長元(1028-1037)頃
134. 略明大日如來不動明王住火生立成大威怒王成就法紙背和歌 高山寺 永承七年 1052
135. 傳藤原行成自筆書狀 藤原行成(972-1027)
136. 古今和歌集(高野切)(第一種)(傳紀貫之筆)
137. 寸松庵色紙(二十七種)(傳紀貫之筆)
138. 秋萩帖(秋萩歌卷)(傳小野道風筆)
139. 繼色紙(傳小野道風筆)
123. 圓珍病中言上書(圓城寺文書)
124. 因幡國司解案文紙背消息(東南院文書) 延喜五年 905
125. 土左日記卷尾臨摹(傳紀貫之自筆、定家寫)(承平五年 935)
126. 育然誕生記 清涼寺 承平八年 938
127. 醍醐寺五重塔落書 天曆五年 957
128. 虚空藏菩薩念誦次第紙背消息 石山寺 康和三年 966
129. 小野道風書狀(集古浪華帖所收) 小野道風(896-966)
130. 北山抄紙背書狀 長徳一長保(996-1004)頃

153

ネ	又	ニ	ナ	ト	テ	ツ	チ	タ	ソ	セ	ス	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	
		尔	奈	止	豆	ツ		多	曾	世		之	佐	己	氣	久	支	可	1
根		尔	奈	止			矢	七	弟	世	夏	四	左	去	介	久	木	可	2
	奴	尔	奈	止	豆			多	曾	世		之		己		久	岐	可	3
	ぬ	尔	奈	止	豆	川		多			之	左		己	介	久	支	可	4
ぬ	ぬ	尔	奈			川	知	大	そ	世	欠	し	出	こ	け	久	支	可	5
尔	又	尔	奈	止	豆	川	知	大	ナ	山	欠	之	作	こ	下	久	支	可	6
							知					之	佐			夕	支		7
根	ぬ	尔	奈	止	豆	川	知	大	曾	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	8
尔	ぬ	尔	奈	止	天	川	知	大	曾	世	欠	之	左	古	介	久	支	可	9
祢	ル	尔	奈	止	天	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	10
ネ	又	尔	ナ	ト	豆	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	11
子	又	ニ	ナ	カ	豆	川	知	大	曾	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	12
ネ	ぬ	尔	小	止	豆	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	13
ネ	ぬ	尔	小	止	豆	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	14
祢	ぬ	尔	小	止	豆	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	15
			小		天	川				世		之		己					16
ネ	ぬ	尔	小	止	豆	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	17
ネ	ぬ	尔	小	止	豆	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	18
	又	々	ナ	ト	元	十		セ	ソ	世	欠	之		己		久	支	可	19
子		ニ	奈	ト	天	川	知	大	ソ	世	欠	之		己	け	久	支	可	20
ネ	又	ニ	七	レ	天	川	知	大	ソ	世	み	之	左	己	十	久	支	可	21
												之		己					22
木	又	々	七	ト	天	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	23
子	又	尔	奈	ト	天	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	24
子	又	ニ	七	止	天	川	知	大	ソ	世	欠	之	左	己	介	久	支	可	25

154

レ	ル	リ	ラ	ヨ	江	ユ	ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ	ノ	
	溜	利		与				毛	米	毛		末	保	フ		非	波	乃	1
	ル	リ	良	与	延	由	也	毛	如	ム	美			フ		比	ハ		2
	礼	留	リ					毛							不		岐	乃	3
	礼	る	リ	良	与	由	ハ		如	え	尺		保	フ	比	比	乃		4
	る	わ	り	わ		上	世	毛	如	え	尺	フ	保	フ	不	比	乃		5
礼	の	利	良		江	由	ヤ	毛	米	ム	美	乃		フ	フ	比	岐	乃	6
				与			ヤ		米							比			7
シ	流	利	良	与			ヤ	毛	目	毛	美	万	保	フ	倍	比	乃		8
シ	い	利	つ	与	江	由	ヤ	毛	如	ム	ソ	万	保	フ	ス	乃			9
シ	ル	リ	う	ト	江	由	ヤ	毛	ム	未	万	保	フ	フ	乃				10
ち	川	留	リ	カ	与	上	也	毛	米	ム	乃	万	保	フ	乃		丈	乃	11
シ	流	リ	う	ト	兄		ノ	毛	二	ム	三	万	保	フ	乃		乃		12
シ	口	リ	一	コ	江	由	也	毛	目	ム	乃	万	保	フ	乃		乃		13
シ	口	リ	一	コ	江	由	之	毛	目	ム	乃	万		フ	乃		乃		14
礼	列	リ	一	与	江	由	ヤ	毛	如	ム	未	万	保	フ	乃		乃		15
	口	リ												フ					16
シ	口	リ	う	ヨ		由		毛	如	ム	乃			フ	乃		乃		17
シ	口	リ	一	コ		ヤ		毛	ム	乃	万			フ	乃		乃		18
シ	ル	リ	う			ヤ		毛	ム	乃	万			フ	乃		乃		19
礼		リ	う			ヤ		如	ム	乃	万	保	フ	乃		乃			20
シ	九	リ	う		二	由	ヤ	毛	ム	ソ	万			フ	乃		乃		21
			良					母	え										22
155	シ	ル	リ	う	と	江	由	毛	如	ム	乃	万	保	フ	乃		乃		23
シ	口	リ	う	与	江	由	ヤ	毛	如	ム	乃	万	保	フ	乃		乃		24
礼	る	リ	う	ト	与	由	ヤ	毛	如	ム	乃	万	保	フ	乃		乃		25

キ	カ	オ	衣	ウ	イ	ア	文 献 名
× マ	ラ 丁	オ 衣			イ	ア	26 妙法蓮華經化城喻品
レ	カ フ	お 衣	フ		イ	ア	27 弥勒上生經贊(白点)
レ マ	カ フ	お 衣	ウ	ウ	イ	ア	28 四分律行事鈔
マ	フ	お	ウ	ウ	イ	ア	29 金光明最勝王經註 釈(奈良本)
ヒ	カ ガ				イ	ア	30 妙法蓮華經優婆 提舍論
木	ウ	於			イ	ア	31 瑜伽師地論卷第八
レ	カ	お	ウ			ア	32 華嚴經卷第二十至八十
サ	カ	お	ス		イ	ア	33 大智度論(聖語藏)
ソ	フ	お		ウ	イ	ト	34 金剛般若經讚述885
木 ナ	カ ガ		ウ		イ	ア	35 弁中辺論(朱点)
チ	カ	オ			イ	ア	36 大般涅槃經卷第十一
木 イ	カ	オ					37 同卷第十二至二十
木	カ	オ			イ	ア	38 蘇悉地羯羅經略疏896
一	カ				イ		39 周易抄 897頃
一				ウ	イ	ア	40 胎藏秘密略軌略述
木	カ	オ			イ	ア	41 息災護摩次第 937
木	カ	オ			イ	ア	42 金剛頂三摩地法 949
キ マ	カ	オ	ウ		イ	ア	43 沙弥威儀經
レ ナ	カ	オ	ウ		イ	ア	44 守護國界主陀羅尼經
					イ		45 蘇悉地羯羅供養法
丈	カ						46 弁中辺論 930
丈	カ	オ			イ	ア	47 妙法蓮華經玄贊(翻)
丈	カ	オ	ウ		イ	ア	48 蘇悉地羯羅經略疏(通)
キ	カ				イ		49 仁王經咒願文
人	フ	お			イ	ア	50 百法顯幽抄
	カ	お				ア	51 成唯識論述記 928
チ	カ				イ		52 弁中辺論 954
サ	カ	お	ウ		イ	ア	53 唯摩詰經
キ マ	カ	於	ウ		イ	ア	54 梵網經(五島本)
レ ナ	カ	オ			イ	ア	55 大東學珍論 955
チ マ	カ	お	ウ		イ	ア	56 沙門玄奘上表記
チ	カ		ウ		イ	ア	57 大毗盧遮那經(圓合 本)
レ ナ	カ	於			イ	ア	58 大唐西域記 卷第十二 (興聖寺)

ン	フ	エ	ウ	ワ	ロ	
	フ					1
	フ	エ		和		2
	フ					3
				和		4
						5
	フ	エ				6
						7
	フ		和	和	ロ	8
	フ				ロ	9
	シ	エ	和	和	ロ	10
	シ	フ	井	和	ロ	11
	フ	エ	井	和	ロ	12
	シ	エ	和	和		13
	シ	エ	和			14
	シ	エ			ロ	15
						16
	シ	エ	和	和	ロ	17
	シ				ロ	18
	シ					19
	シ				ロ	20
						21
						22
	シ		和	和	ロ	23
	フ	エ	ウ	和	ロ	24
ン	フ	エ	ウ	和	ロ	25

156

ハ	ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	テ	ツ	チ	タ	ソ	セ	ス	シ	サ	コ	ケ	ク	
ハ	乃	子?	メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち?	チ?	そ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	26
ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	止	天	ツ	チ	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	27
ハ	ノ	ノ	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	28
ハ	乃	ノ	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	29
ハ?	子		メ	ル?	セ	止	天	ツ	チ	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	30
ハ	乃		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	十	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	31
ハ		ル	メ	ル?	セ	止	天	ル	ち	チ	十	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	32
ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	十	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	33
ハ	ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	34
	ノ		ヌ	ニ	ナ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	35
ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	36
ハ	乃		メ	ル?	セ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	37
ハ	ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	38
						ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	39
ハ			ニ	ナ		ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	40
ハ	ノ		ニ	ナ		ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	41
ハ		メ	ル?	セ		ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	42
ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	43
ハ	ノ	ル	メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	44
ハ	ノ		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	45
ハ	ノ		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	46
ハ	ノ	子	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	47
ハ	ノ	子	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	48
ハ	ノ		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	49
子	乃	子	ヌ	ニ	ナ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	50
ハ		メ	ル?	セ		止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	51
ハ	乃		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	52
ハ	ノ		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	53
ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	54
ハ		メ	ル?	セ		ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	55
157	ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	ト	天	ル	ち	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	56
ハ	ノ		メ	ル?	セ	ト	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	57
ハ	乃	子	ヌ	ニ	ナ	止	天	ル	ち	チ	ソ	セ	ス	シ	サ	こ	ケ	ク	58

	ワ	ロレルリラ	ヨ江ユヤ	モメムミマ	ホハフヒ	
		ロレルリラ	ワ? 上ヤ	モメムミマ	ホハフヒ	26
	ロ	ルレリリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	27
	ロ	ルレリリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	28
	(木)	ルレリリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	29
		ルレリリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	30
		ルレリリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	31
	和	ロレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	32
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	33
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	34
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	35
	木	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	36
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	37
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	38
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	39
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	40
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	41
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	42
	和	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	43
	木	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	44
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	45
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	46
	和	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	47
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	48
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	49
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	50
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	51
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	52
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	53
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	54
		ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	55
	和	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	56
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	57
	ロ	ルレリラ	トIIゆハ	ニメムニ万	呆レフヒ	58

158

ケ	ク	キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア	文 献 名
	ク							ア	59 入楞伽經
	ク			お		り			60 金剛界大法念誦次第
ナ	久	キ	カ	オ		于	イ	ア	61 大日經隨行儀軌 948
	ク	キ	カ		エ	于	イ	ア	62 大聖妙吉祥菩薩教令法輪 950
ナ	久	キ	カ	お	以	多	ウ	ア	63 求聞持法 964頃
	ク			お	エ				64 地蔵十輪經(知恩院)
ナ	久	キ	カ	お	衣	于	イ	ア	65 古文尚書(東洋文庫)
ナ	久	キ	カ	お		ハ	イ		66 毛詩(〃)
ナ	久	キ	カ			于	イ	ア	67 蒙求(保良氏旧蔵)
ナ	久	キ	カ	お	以	于	イ	ア	68 漢書楊雄伝 948
ナ	久	キ	カ	お	エ	ハ	イ	ア	69 漢書高帝紀(石山寺)
	ク					ハ			70 漢書周勃傳(大明院)
								ア	71 世説新書
ナ	久	キ	カ	ハ	エ	ハ	イ	ア	72 日本書紀(鎌澤文庫)
ナ	久	キ	カ	オ		丁	イ	ア	73 蘇悉地羯羅經 909
ナ	久	キ	カ	オ	エ	于	イ	ア	74 金剛界儀軌 987
	ク	キ	カ	オ			イ	ア	75 成唯識論卷第5 988
ナ	久	キ	カ	オ	エ	于	イ	ア	76 妙法蓮華經釈文
	ク					于	イ	ア	77 法華義疏(黄茶点)
ナ	久	キ	カ	オ	エ	于	イ	ア	78 同 (朱点) 1002
ナ	久	キ	カ				イ	ア	79 同 (白点)
ナ	久	キ	カ	オ	エ	于	イ	ア	80 十=天法(高山寺)
ナ	久	キ	カ	オ	エ	于	イ	ア	81 金剛頂摩訶心念誦儀軌(東山寺) 988
ナ	久	キ	カ	オ	エ	ハ	イ	ア	82 金剛界儀軌 1004
ナ	久	キ	カ	オ		ハ	イ	ア	83 成唯識論 1020
ナ	久	キ	カ	オ	エ	ハ	イ	ア	84 大般涅槃經(東大寺)
ナ	久	キ	カ	オ		于	イ	ア	85 大日經(国会) 1022
	ク						イ	ア	86 成唯識論卷第10 1023
ナ	久	キ	カ		エ	丁	イ	ア	87 大日經義釋 1024
ナ	久	キ	カ	オ	エ	ハ	イ	ア	88 聖德太子感得玉璽經 1025
ナ	久	キ	カ	オ	エ	ハ	イ	ア	89 建立曼荼羅護摩儀軌 1040
159	ナ	久	キ	オ	エ	ハ	イ	ア	90 護摩密記 1035
ナ	久	キ	カ				イ	ア	91 千字儀軌(石山寺) 1045
ナ	久	キ	カ		エ	于	イ	ア	92 金剛頂經觀自在王如來修行法 1046
ナ	久	キ	カ				イ	ア	93 大日經卷第七(石山寺) 1040

シ	フ	エ	井	
	シ			26
	シ	フ	エ	27
	シ	エ	エ	28
	シ		エ	29
				30
				31
	シ		エ	32
	シ	エ	エ	33
	シ			34
				35
	シ			36
				37
	シ	フ	井	38
				39
				40
				41
		エ		42
	シ	エ	エ	43
	シ		井	44
				45
	シ			46
	シ	エ		47
	シ		エ	48
	シ		井	49
	シ			50
	シ			51
	シ			52
	シ			53
	シ		井	54
				55
	シ	エ	エ	56
	シ			57
	シ	エ	井	58

フヒハ	ノネヌニナ	トテツチタ	ソセスシサ	コ	
フヒハ	乃ヌニナ	トス...	ソセ...	ニ	59
ヒ	セ	ト...	セ...	ニ	60
フヒハ	乃ネニナ	ト(出)テ...	セ...	ニ	61
ヒ	ル	ト...	セ...	ニ	62
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	セ...	ニ	63
フヒハ	乃ヌニナ	ト...	ソセ...	ニ	64
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	セ...	ニ	65
ヒ	ル	ト...	セ...	ニ	66
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	セ...	ニ	67
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	68
フヒハ	乃ヌニナ	ト...	ソセ...	ニ	69
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	セ...	ニ	70
ヒ	ル	ト...	セ...	ニ	71
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	72
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	73
ヒハ	ノニナ	ト...	ソセ...	ニ	74
フハ	ノニナ	ト...	ソセ...	ニ	75
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	76
フハ	ル	ト...	ソ...	ニ	77
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	78
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	79
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	80
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	81
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	82
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	83
不ヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	84
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	ニ	85
	ケナ	ト	セ	コ	86
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	コ	87
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	コ	88
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	コ	89
フヒハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	コ	90
フハ	乃ネニナ	ト...	ソセ...	コ	91
フハ		ト...	ソセ...	コ	92
フハ	ナ	ト...	ソセ...	コ	93

160

五井ワ	ロルリラ	ヨ江ユヤ	モメムミマ	ホ ¹ へ	
	ルリラ	ヤ	ミ? ムミミ?	へ ²	59
志	ルラ	ヨ ² ルヤ	めえ	み ¹	60
	ルリニ	ヨ ⁵ ヤ	モメム	み ¹	61
	ルニ	ヤ	メム	ニ ²	62
乃の	ル ¹ ル ³ リラ	ヨ ² 由ヤ	れめム ² ミ ³ 末	乃 ¹ へ ²	63
の	ル ¹ リラ	ヤ	メム	乃 ²	64
恵乃和	ル ¹ ル ³ リラ	ヨ ⁵ 江由ヤ	えめム ² ミ ³ 末	乃 ¹ 保 ²	65
乃和	ルラ	ヨ ¹ 由ヤ	え		66
	ルリ	ヨ ¹ 由ヤ	メムミ ³ 万	乃 ¹ 乃 ²	67
乃 ¹ 乃 ²	ル ¹ ル ³ リラ	ヨ ⁵ 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ 乃 ²	68
志恵井乃の	ル ¹ ル ³ リ	ヨ ² 由ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ 乃 ²	69
	ル ¹ リ ² ラ	由	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ²	70
	ル	マ	テ	乃 ²	71
市乃采	ロルリラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ²	72
	ル ¹ リ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	メ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ²	73
	ロルラ	ヨ ⁵ 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ 乃 ²	74
	ル ¹ リ ² ラ	ヨ ² ヤ	モ ² ム ³	へ ²	75
十井 ¹	ロルリラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ 乃 ²	76
乃	ラ	ヤ	テ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ²	77
志乃	ル ¹ ル ³ リラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ 乃 ²	78
	ル ¹ リ ² ラ	由 ¹ ヤ	テ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ²	79
市	ロルリ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	メ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ¹ へ ²	80
	ロルリ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	メ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ²	81
志	ロルリ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ へ ²	82
の	ロルリ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ²	83
十井 ¹	ル ¹ ル ³ リラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ 乃 ²	84
	ロルリ ² ラ	ヤ	モ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ²	85
	ル ¹ リ ² ラ			乃 ²	86
井 ¹	ロルリ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	メ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ¹ 乃 ²	87
志井 ¹	ロルリ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ へ ²	88
志井 ¹ 末	ル ¹ リ ² ラ	ヨ ² 由 ¹ ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ¹ へ ²	89
161 志井 ¹ の	ロルリ ² ラ	ヨ ² ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ²	90
の	リ ² ラ	ヨ ²	メ ² ム ³ ミ ⁴ 末	乃 ²	91
	ラ	ヨ ² ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	乃 ²	92
	ロルリ ² ラ	ヤ	モ ² メ ³ ム ⁴ ミ ⁵ 末	へ ²	93

サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア		文 獻 名
サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア	94	不空羅索神呪心經1045
サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア	95	妙法蓮華經(明算)1058
聖七	コ	ケ	ク	キ	カ			ウ	イ	ア	96	大日經成軌法1044
七	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	エ	ウ	イ		97	大日經卷第一(五島村)1040

佐左	古介久支加	お	字	伊	安	阿	101	日本靈異記(興福辨)
佐サ	古介久支加	於	衣	字	伊	阿	102	同 (前田本)
佐左	古介久支加	於	字	伊	意	安	103	同 (真福寺本)
佐	古介久支加		字	移	阿		104	日本感靈録(竜門文庫)
サ	古介久支加	お	ウ		あ		105	周易抄(割注部)
佐	古介久支加		ウ	伊	阿		106	法華義疏裏書
	古介久支加				阿		107	大般若經音義(信行)
佐	古介久支加	於		伊	阿		108	善珠撰書類(名)
左	古介久支加	於	衣	于	伊	阿	109	一字則輪王儀軌音義(秘)
佐	古介久支加	於		伊	阿		110	皇太神宮儀式帳(神宮)
佐	古介久支加	於		字	阿		111	古語拾遺(嘉禄本)
佐	古介久支加	於		伊	阿		112	日本後紀(本文)
左	古介久支加	於					113	同 (割書)
散左佐	古介久支加			字	伊	阿	114	日本三代実録(割書)
左佐	古介久支加	於	衣	字	伊	阿	115	新撰字鏡(天治本)
佐	古介久支加	於	衣	字	伊	阿	116	本草和名(日本古)
佐散	古介久支加	於	衣	字	伊	阿	117	和名類聚抄(高山寺本)
佐サ	古介久支加	於	衣	字	伊	阿	118	医心方卷第一(和辨)
狭佐	古介久支加	於		字			119	新撰万葉集(寛文版)
佐婆装砂	古胡擧許己	於	衣	字	伊	阿	120	日本紀竟宴和歌(本妙寺本)

ン	フ	
	ウ	59
		60
	ウ	61
		62
ん	ウ	63
ん	ウ	64
	ウ	65
		66
フ		67
	ウ	68
	ウ	69
		70
		71
	ウ	72
	ウ	73
ん		74
コ	ウ	75
ル	ウ	76
	ウ	77
ル	ウ	78
	ウ	79
		80
		81
	ウ	82
	ウ	83
ン	ウ	84
フ	ウ	85
		86
ル	ウ	87
ル	ウ	88
ル		89
ル	ウ	90
	ウ	91
		92
	ウ	93

162

ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ	ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	チ	ツ	チ	タ	ソ	セ	ス	シ	
号	ル	フ	ヒ	ハ	ノ	示	ヌ	ニ	太	ト	チ	川	子	夕	ソ	セ	ス	シ	94
小	ヘ	フ	ヒ	ハ	ノ	示		ニ	ナ	ト	テ	川	子	夕	ソ	セ	ス	シ	95
示	号	ル	フ	ヒ	ハ	ノ	ネ	ヌ	ナ	ト	天	川	子	太	ソ	セ	ス	シ	96
示	号	ル	フ	ヒ	ハ				ナ	ト	チ			夕	ソ	セ	ス	シ	97

保	倍	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	101
保	部	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	102
保	部	不	比	波	乃	尔		尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	103
倍	不			波	乃				那	止	天	都	川	知	多			須	志	104
保	倍	不	比	波		祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	105
保	夫	不	比	波		祢	尔	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	106
			比	波	乃	尔	尔	尔	那			都				曾	世	須	志	107
保	倍	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	108
保	部	不	比	波	乃	子	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	109
	用		比	波	乃	祢	尔	尔		止	天	都	川	知	多			須	志	110
保	倍		比	波	能	祢	尔	尔	那	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	111
保	倍	不	比	波	乃		尔	尔	那	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	112
	倍	不	比	波	乃		尔	尔	那	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	113
保	部	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	114
保	倍	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	115
保	倍	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	116
保	倍	不	比	波	乃	祢	尔	尔	那	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	117
保	倍	不	比	波	乃	祢	奴	尔	奈	止	天	都	川	知	多	曾	世	須	志	118
保	倍			波		福	沼	爾	那	砥	手	都	川	知		曾	世	須	志	119
保	倍	不	比	波	能	祢	奴	尔	那	渡	斗	都	川	知	多	曾	世	須	志	120

163

ン	ヲ	エ	井	ワ	ロ	ル	リ	ヲ	ヨ	江	ユ	ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	
√	ッ	エ	井	ワ	ロ	ル	リ	ヲ	ヨ		上	セ	モ	メ	ム	ミ	マ	94
>	ッ			ワ	ロ	ル	リ	ヲ	ヨ		上	ヤ	モ	メ	ム	ミ	マ	95
						ル	リ	ヲ			上	ヤ	母	メ	ム	ミ	マ	96
	シ		井		ロ	ル	リ	ヲ	ヨ				モ					97

	乎	恵	の	れ	礼	流	利	良	与	江	由	ヤ	毛	米	元	見	美	末	101
√	乎	恵		和	礼	流	利	良	与		上	夜	毛	女	牟	美	万	102	
	乎	恵		和	礼	流	利	良	与			夜	毛	目	牟	見	万	103	
				和	(礼)	留	良	良	与			夜	母		(牟)	美		104	
					し	る	わ	良	与		上				元		万	105	
	乎	恵			礼	流	利	良	与	江		夜	毛		牟	美	万	106	
					礼		利				由		母				麻	107	
		恵		和	礼	流	利	良	余		由	夜	毛	米	牟	弥	麻	108	
	乎			和		留	利	良	与	江	由	也	毛		牟		万	109	
					礼	留	理	良	与		湯		母		牟	弥	真	110	
				和	礼		利	良	与		由	夜	茂	女	武	美	麻	111	
	乎	恵			礼	流	利				野		毛		武	美	万	112	
	乎	恵			礼	留	利	良	與				毛	米	牟	美	万	113	
	乎	恵			礼	留	利	良	與		耶	也	毛	米	牟	美	万	114	
	乎	恵	の	和	礼	留	利	良	与	江	由	也	毛	女	牟	美	万	115	
	乎	恵	為	和	礼	留	利	良	与	江	由	也	毛	女	牟	美	万	116	
	乎	恵			礼	流	利	良	与	江		夜	毛	米	牟	美	万	117	
	乎	恵	為	和	礼	留	利	良	与		由	也	毛	女	牟	美	万	118	
	結				礼	留	里	良	與	江	湯	八	蒙	咩	牟	美		119	
	乎	恵	為	和	礼	留	利	良	豫	要	由	野	蒙	咩	牟	美	麻	120	

164

ソ	セ	ス	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	文 献 名	
	セ		シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	121	讃岐国戸籍帳端書667
					コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	122	千手観音像臂内櫓 扇橋落書 877
						ク				オ	江	ウ	イ	ア	123	円珍病中言上書
	セ		シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	124	因幡国司解案文紙 背消息 905
	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	125	土左日記巻尾臨筆 935
					コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	126	齋然誕生記 938
						ク				オ	江	ウ	イ	ア	127	醍醐寺五重塔落書 951
ソ	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	128	虚空蔵菩薩念誦次第 紙背消息 966
ソ						ク				オ	江	ウ	イ	ア	129	小野道風書状~964
ソ	セ		シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	130	北山抄紙背書状~1004
ソ		ウ			コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	131	御堂関白日記所載 和歌及仮名文 1004 1011
ソ					コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	132	因明義断略記紙 背和歌 1010
	セ		シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	133	延喜式紙背書状 ~1037
						ク				オ	江	ウ	イ	ア	134	略明大日如来不動明 王住火生立成大城怒王 成就法紙背和歌 1052
ソ	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	135	傳藤原行成筆自 筆書状 ~1027
ソ	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	136	古今和歌集 (高野切)
ソ	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	137	寸松庵色紙
ソ	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	138	秋萩帖
ソ	セ	ウ	シ	サ	コ	ケ	ク	キ	カ	オ	江	ウ	イ	ア	139	緋色紙

165

メ	ム	ミ	マ	ホ	ヘ	フ	ヒ	ハ	ノ	ネ	ヌ	ニ	ナ	ト	テ	ツ	チ	タ		
	元	包	主		二	布	江	は	乃		尔	尔	尔	と	之			の	太	121
	元?		未					は		ね?	尔									122
		見	未		二	布		は					尔						太	123
め	人		ま		へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	子	ま		と	つ				こ	124
	人	み	ま	は	へ		ひ		の	ぬ	に	れ	ま	と	て	つ	ち		こ	125
	く		ま				ひ		の		に			ど	つ					126
				は?		ふ?	ひ	は	れ									ち?	た?	127
め	人	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	子	ま	ら	と	て	つ			こ	128
	人		ま			ふ		は					る	と	ま				た	129
	人	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	子	ま	ら	と	て	つ	ち		こ	130
め	人	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	に	れ			て	つ	ち			131
		み	万			布	ひ	を	の		ま	な		と		つ	ち			132
	む		ま	ほ	へ	ふ	ひ	は		ぬ	子	ま	ら	と	ま	つ	ち		こ	133
	之		ま				ひ		の		ろ	れ		と	て				た	134
め	人	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	子	ま	ら	と	て	つ	ち		た	135
め	人	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	子	ま	ら	と	て	つ	ち		た	136
め	人	み	ま	ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ぬ	子	ま	ら	と	て	つ	ち		た	137
女	面	美	未	伴	二	布	忠	乃	乃	祿	ぬ	子	ま	車	二	車	車	車	車	138
子	年	子	子	和	一	布	乃	乃	乃	手	ぬ	子	ま	車	二	車	車	車	車	139

166

〔第3表〕平安時代の文献種類別仮名字母一覽表 (「」は用例のきもの)

平安初期(7-37)	平安中期(37-78)	平安後期(78-119)	訓注類(101-106)	典籍本文(107-118)	新撰万葉集(119)	日本紀章句和歌(120)	平假名文(121-137)	同(138-139)	草假名文(138-139)						
訓	ヲ	エ	キ	ワ	ロ	レ	ル	リ	ヲ	ヨ	江	エ	ヤ	モ	
					れ			わ	言	5				も	121
															122
								わ							123
	を				え		ろ	わ	ら	よ	17			ん	124
	を			わ		れ	ろ	ら				や	え		125
								ろ							126
						れ	ろ			5?					127
	を				れ	ろ	わ	ら		よ	17	や	え		128
	を				れ	ろ	ら					や	え		129
	を		わ	わ	れ	ろ	り	ら		よ	17	や	え		130
	を		わ		れ	ろ	り	ら				や	ん		131
					れ	ろ	り						え		132
	を		る					わ		よ	17	や			133
						ろ	ら			よ	17	や	も		134
	を		わ		れ	ろ	わ	ら		よ	17	や	も		135
	を	え	わ	わ	れ	ろ	り	ら		よ	17	や	ん	え	136
	を	え	わ	わ	れ	ろ	り	ら		よ	17	や	ん	え	137
	を			れ	ろ	ら	ら			よ	17	や	ん	え	138
	を	え			れ	ろ	ら			よ	17	や	ん	え	139

167

ト 止刀「王」	テ 豆天「手」	ツ 川(州? 品?)	チ 知千「竹」地	夕 大太多「田」陸	ソ 曾「十」	セ 世(世)	ス 須「為」	シ 之四志士	サ 左佐「作」坐	コ 己「古」子 去乎其	ケ 氣介「家計毛」儀	ク 久九「口」	キ 支岐伎木寸義「發」?	カ 加可我何香	才 於	衣 衣「依亞」	ウ 有字于	イ 伊以已	ア 阿安
止	天	川	知千	大太多	曾	世	須寸	之	左散「佐」	己 「古」子己	介計「下」	久九	木幾「支」	加可	於	衣	字于「有」	伊以	阿安
止	天	川	知千	大太多	曾	世	須寸	之	左散	己	介計	久	木幾	加「可」	於		字于	伊	阿
土土東斗?	天豆	川都豆津	地千	太多他	曾	世	須數主	之志師自徒	左佐	己 古「古」 許去	介毛氣	久具九	岐支幾木	加可詞我夏	於	衣	字于有	伊移意	阿安
止登都度 <small>東</small>	豆天(冬)	川豆都	知智治達	大太多	曾蘇	世足	須受 <small>自</small>	之志斯師	左佐散	去許居	奇氣介計	久句	支岐喜木 <small>也</small> 杖只	加可賀我	於	衣	字于	伊以	阿安
砥	手	都津	知		曾	世勢	須栖	芝	佐沙狀	己 己許	藝	久具	岐杵	加鹿歟	於		字		
止斗土渡登東跡	豆天底傳	都津菟	知智	多陀歇	曾蘇曾楚	世勢	須儒數	之志四斯祀芝許事私	佐沙裝	古己胡許攀	氣介計昇鷄	久致俱矩	支岐吉枳幾機唇鐵起	加迦賀做可呵嘉我	於	衣	字	伊美以	阿阿
止	天	川	知	多不	曾所	世	須數春	之	左佐散	己許	計介	久	支木幾	可加	於	衣	字	以	安
止東度	天	川津	知	多太堂	曾所	世勢	須寸春數	之志	左佐散	己	計介希達	久九	支幾	可加開	於	衣	字	以	安
止等東度登	天轉帝傳	川都徒	知地	太多堂當唾?	曾蘇所處	世勢	須數春	之志事新	左佐散斜	古己許期	氣介計達	久具求	支幾起出且	可加開賀我	於	衣	字于雲	以移意	安阿

良	与 〔夜世〕	江 延江〔兄〕	由	也 〔八〕	毛 母	米 女目	无 牟ム〔六〕	美 三見未	万 末〔真〕	保	不 布	比 〔悲〕	波 着八	乃	祢 根子〔年〕	奴	尔 二〔仁〕	奈 〔那〕
良	与	江	由	也	毛	女	无ム	美 見三	万 末	保	不	比 〔悲飛〕	波 八〔着〕	乃 能	祢 子	奴	尔 二〔仁〕	奈 〔那〕
良	与	江	由	也	毛	女 米	ム	美 見三	万 末	保	不	比	八	乃	祢 子	奴	尔 二	奈
良	与	江	由	也 夜	毛 母	米 女目	无 牟〔無〕	美 三見	末 万	保 日?	不 布夫	比 飛備	波 皮八婆	乃	祢	奴	尔 二仁	奈 那〔難〕
良羅	与 余與	江	由 湯	也 夜野耶	毛 母〔茂〕	米 女〔迷〕	无 牟	美	末 万萬末	保 〔奉〕	不 布夫	比 斐悲備	波 婆〔包〕	乃 能	祢 尼〔子〕	奴 〔努〕	尔 仁爾〔通〕	奈 奈〔索〕
良	與	江	湯	也 八也	裳 牟	咩	牟	美		保	倍		婆		禰	沼	爾 丹	那
良朗羅羅	与 豫餘譽	要 商	由 遊	也 野耶野邪	毛 母裳蒙	女 米咩迷謎	牟 无無武	美 微游見	末 麻方摩磨莽滿	保 葆衣朋	不 布府	比 毗飛毗	波 婆破簸撥播者	乃 能	祢 然	奴	尔 介仁你迤尼兒珥	那 奈難儼
良	与	江	由	也	无 毛	女	无 〔無〕	見 美	末 〔万〕	保	不 布	比 悲	波 着	乃 能	祢	奴	尔 仁〔耳〕	奈 那
良羅	与 夜	由 遊	也	毛 母	女 免	无 武舞	美 見三	万 末	保 本	不 布婦	比 日悲	波 八者盤	乃 能	祢 年	奴	尔 仁二	奈 那	
良羅	余 餘	要	由 遊喻	也 夜耶	毛 母蒙蒙	女 面馬	無 牟武	美 見	末 萬	保 本奉	不 布	悲 飛	波 破盤頗 者	乃 能	祢 年	奴	尔 耳兒	奈 難那

169

ヲ 乎雄	エ 惠	キ 為井	ワ 和	ロ 呂	レ 列礼	ル 留流	リ 利「理」
乎遠	惠	為井	和	呂	礼	留流	利
乎	惠	井	和	呂	礼	流	利
乎雄	惠		和	呂	礼	留流	利里
乎遠「遠」	惠	為	和「委」	呂路「倍」	礼	留流	利理里
緒				呂	禮例	留	里
半表鳴遠	惠	為	和	呂路	礼禮麗	留流聲	利梨理釐
遠乎		為	和	呂	礼「禮」	留	利
遠	惠	為	和	呂	礼	留流類	利
乎遠越	惠慧		和	呂路叢	礼禮	留流	利理里

(148 頁より続く)

ケ 氣家成中期以降亡びる。

コ 去・乎・其 中期以降亡びる。

ク 作・坐 初期にも稀であるが中期以降亡びる。

ク 佐 中期に稀になり、後期以降亡びる。

シ 四・志・士 中期以降亡びる。

ス 為 初期にも稀であるが中期以降亡びる。

ソ 十 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

タ 田陀 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

チ 竹・地 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

テ 豆 中期以降亡びる。

ト 刀 中期以降亡びる。

ト 土 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

ナ 那 初期、中期に稀であるが、後期以降亡びる。

ニ 仁 初期、中期に稀であるが、後期以降亡びる。

ネ 根・年 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

ハ 着 中期に稀となり、後期以降亡びる。

ヒ 悲 初期、中期に稀であるが、後期以降亡びる。

フ 布 中期以降亡びる。

ヘ 倍 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

マ 眞 初期にも稀であるが、中期以降亡びる。

170

ミ 未 中期以降でびる。

ム 牟 中期以降でびる。

六 初期にも稀であるが、中期以降でびる。

メ 目 中期以降でびる。

モ 母 中期以降でびる。

ヤ ハ 初期にも稀であるが、中期以降でびる。

江(王) 延 中期以降でびる。

兄 初期にも稀であるが、中期以降でびる。

ヨ 夜、世 初期にも稀であるが、中期以降でびる。

リ 理 初期にも稀であるが、中期以降でびる。

レ 列 中期以降でびる。

平 為 後期以降でびる。

ヲ 雄 中期以降でびる。

これらのうちから見ると、中期以降でびたものは、初期において既に用例の稀であったものが多い。その例として、

亞・依・音・口・作・西・為・十・田・陀・竹・地・土・

根・年・倍・眞・六・八・兄・夜・世・理

などが挙げられる。この中には、四・六・八のやうな数字のあること、又、早・倍・夜・理のやうに、訓点資料以外では後まで用おられるもののあること、などが注意される。

れる。

しかし、それにも増して注意すべきは、平安初期には頻りに用おられてきたのに、平安中期になると、ほとんまりと姿を没してしまふ一類が存することである。例へば、

安・有・可・伎・寸・氣・志・豆・刀・者・布・未
・牟・母・延・列・為

などである。これらの中、「安・有・可・者・為」等は、平仮名字体の衰亡によつて中期以降、訓点資料から姿を消したとも見られるが、「氣」「豆」「布」「列」などは、さうとは考へられず、原因が不審である。「氣」から出た「ヒ」などよりも、「計」から出た「十」、「介」から出た「个」などが、書き易い理由があつたのかも知れない。「豆」よりも「天」又は「此」から出た「チ」の方が便利な何等かの理由が存したのかも知れない。とにかくこれらの字母が、平安中期以降、訓点の世界から消えることは事実であつて、それは、年代未詳の資料の時代判定などに有用であらうと思はれる。

次に、右とは逆に、平安初期には皆無乃至は稀であつた字母が、中期以降、又は後期以降になつて出現して来るといふ例がある。例へば、

キ 幾 平安初期には稀であるが、中期以降盛に用

おられる。

サ 散 初期には稀であるが、中期以降盛用される。

ス 寸 初期には見えないが、中期、後期に用おられる。

右の表からは凡そこの三例であるが、「幾」から出た「レキ」や、「散」から出た「レサ」は、後世の標準的片仮名字体となつたものであり、「寸」から出た「レ寸」もよく用おられたもので、これらは、確に、時代と共に字母が減少するといふ大きな流に逆らつてゐるもののやうに見える。「レサ」の「散」については、偶々上の表の内、平安初期のものの中には挙作なかつたが、小林芳規博士より、石山寺藏金剛頂瑜伽略出念誦經卷第四の延喜頃白点に「重」に「つち子チ（オキマエ）」の傍訓ある由御教示を得た。

「幾」を字母とするものは、9願經四分律古点の「レキ」、10金光明最勝王經古点の「レキ」、11東大寺諷誦文稿の「レキ」、12弥勒上生經贊古点の「レキ」などを考へられなくもないが、これらは「支」又は「木」から出たとも見得るのであり、他には「支」などが圧倒的多数を占めてゐる所から見て、「幾」からの可能性は薄いと見てよいと思はれ

る。「幾」から出たと見られる確な例は、33大智度論古点の「レサ」、并中辺論古点の「レサ」などであり、これらは何れも九世紀も末頃の、平安中期に近い頃の加点と見られるものである。平安中期十世紀に入つても、尚「支」の系列のものは多用されてゐるが、73蘇悉地羯羅經延喜点の「レサ」、61大日經隨行儀軌天曆点の「レ寸」も併用)など、明に「幾」の系列と認められるものも、漸く多くなる。殊に、68古文尚書古点の「レサ」も併用)、66毛詩古点の「レサ」、43沙弥威儀經古点の「レサ」も併用)など、一般に平仮名的字体の多い文献には頻用されることが注目されるのである。そして、平安中期までは、「支」の系列のものも、まだ勢力が強く、相當の用例数があるのに、平安後期に入ると「支」系のものは殆ど姿を消し、「幾」系の全盛の時代に入ると見られるのである。

万葉仮名文献では、日本靈異記の前田本(下十)に文中注「レサ（合）」とあるのが例外的なもので、他の文献(10、11)には、全く所見が無い。たゞ20日本紀實録和歌には使用されてゐる。日本靈異記の前田本は、鎌倉時代嘉禎二年(一二三六)の写本であり、同じ箇處を、眞

福寺本では、章末訓注で「翼アノ、キ」とあり、或いは後世書字の際の転訛と考へられなくもない。何れにせよ、「幾」が万葉仮名文献では一般に使用されないことは事実であり、この点、訓点資料と接を一にすると見ることが出来る。

所が、平仮名文献に目を転ずると、様相は一変する。

即ち、121と139の間で見られるやうに、「支」の系列のものも、124・125・128・129・130・135・136・137のやうに少からず用いられるが、一方、「幾」の系列のものも、126・128・130・133・134・136・137のやうに頻用され、138抄抜帖や139、継色紙に至つては、「起」の系列と共に、主要な部分を占めてゐる。「幾」の初見は126、奈良誕生記であつて、それ以前のものは何れも「支」の系列のものであることは、起源的に此の方が古いことを示してゐると思はれるが、十世紀初期以来「幾」系列が出現する点は、訓点資料と同様である。この点から見て、「幾」字の発生と發達は、十世紀に入つてから始り、それ以前から存した「支」系列を徐々に駆逐して、十一世紀以降に全盛期に至つたと見てよいのではないか、そしてこの傾向は、訓点資料と倭名文と両方で併行して進んだが、訓点資料の場合に

は、比較的單純に「幾」系列の「セ」「ヤ」「ノ」「キ」などが制覇したが、平仮名文では、伝統性の強い爲に、後まで「支」系列のものも残存併用されたのであらう。又、万葉仮名文については、平安後半期以降の調査が未了であるため、十分に明ではないが、少くとも九世紀に「幾」が稀であつたことだけは言へるのではないかと思はれる。そして、この一つの事実から考へられるのは、仮名字体といふものは、平仮名にせよ片仮名にせよ、万葉仮名から生じたといつても、それは必ずしも通時的な問題とは限らないのであつて、同時代における文献相互間といふか、同時進行的に、草体化又は省画化が進行した場合もあつたといふことを指摘出来ると思ふのである。

確かに「幾」字は、奈良時代にも用例は在つた。しかしそれは古事記・日本書紀の場合だけであつて、万葉集その他の文献には所見がない。記紀には夫々独自の用字意識が見られることであるから、それ以外の文献に見えないことは、この字母が、必ずしも一般に通用したものでなかつたことを反映してゐるのかも知れない。一方、「支」は、上代文献には広く殆どすべての文献に見え、その中には実用を旨とした正倉院文書なども含まれてゐること

は、同じく実用を旨とした訓点資料や、初期平仮名文獻に「支」が主として用ゐられてゐることと、互によく符合する事實である。又、字画の点から見ても、僅か四画の「支」の方が、十二画の「幾」よりも、実用性に富むことは明白であり、結局、平仮名、片仮名共に、その初期は「支」系列が主流を占めてゐたことは、実証的にも理論的にも、言へると思ふのである。

更に考へるのに、訓点資料で「幾」系列の仮名字体が現れた際、上掲のやうに、「サ」「ヤ」などの形から出發することも、注目すべきであらう。若し「幾」字そのものの楷書又は行書から出たとするならば、他の字母の場合に多くさうであるやうに、その漢字の種々の部分の者画の例が併出して熟るべきである。「幾」の場合、「𠂔」「𠂕」「𠂖」などの形があつてほしい所なのである。所が実際には、このやうな形は、全く見出されない。これは、既に中田祝夫博士が指摘されたやうな「幾」字直接からでなく、その草体「𠂗」から出たとする説の正しさを裏附ける事實であらうと思はれる。

この「幾」と相似たケースが、「散」(サ)の場合にも認められると思はれる。サの仮名の字母は、訓点資料

に於ては、平安時代には、殆どの場合、「佐」「左」の二字で占められてをり、平安中期になつても、「左」から出た「𠂘」「𠂙」「𠂚」「𠂛」「𠂜」や、「佐」から出た「𠂝」が大部分を占めてゐる。但し他に初胎藤秋密略大軌古点の「人」といふ独自のものがある。所が、中期の後半あたりから「サ」の形が見えて来る。68漢書楊雄伝天曆点、69漢書高帝紀古点、74金剛界儀軌永延点などの例がそれであつて、平安後期に入ると急激に増加することは、75-77の表によつて明瞭である。

所で、「サ」の字源については、古来種々の説があり、「薩」「𠂛」なども考へられてゐるが、万葉仮名の用法が多くないことなどの点で難点があり、近時は「散」字説が有力のやうに思はれる。「散」は、奈良時代には万葉集に多くの用例がある他、播磨風土記にも例があるが、その他の文獻には所見がない。万葉仮名文獻の中では、平安初期には日本三代実録に見えるが、他には見当らぬ。この点、訓点資料と類似してゐると思はれる。平安中期には、高山寺本和名抄に例がある。

平安、平仮名文では、124因幡国司解文紙背や125土左日記と始として、平安中期には頻用字体の一つに数へてよ

い程の隆盛ぶりを示してゐる。平安初期の平仮名文資料の欠如が、論の弱点であるが、この場合も、平安初期を空白期間として、平安中期に至つて、「散」系列の字体が復活し、それが後に漸く栄えつつ継続して行つたと見てよいのではあるまいか。そして、「幾」の場合と同じく、「散」を字母とする仮名の系列は、奈良時代からの通時的な流れの結果ではなく、平安中期において、~~平~~資料↓訓点資料といふ影響関係を想定してよいのではないかと思はれる。

「寸」は万葉集では多くキの仮名として用ゐられ、その仮名の例は僅少である。訓点資料では、平安初期には所見なく、平安中期に至つて、~~延~~蘇悉地経略疏重平点・~~41~~思受護摩次第承平点、~~63~~求聞持法康保点、~~68~~漢書楊雄伝天曆点、~~69~~漢書高帝紀古点などに「寸」の形が現れ、平安後期に入ると、~~81~~金剛界儀執寛弘点、~~83~~金剛界儀軌長保点、および ~~93~~大日経長曆点などに見え、以下用例が多くなる。(これらはフコト点等から見て、天台系のものが多いことが注意される。)一方、平安初・中期の万葉仮名文献には所見なく、平仮名文にも業外少く、~~133~~行成書状に見える位に過ぎない。

これらの分布から見ると、「寸」をキの仮名に用ゐるのは、やはり平安中期から興隆した傾向で、奈良時代以来の連続した伝統とは考へにくいのである。

以上、「幾」「散」「寸」の三つの例について、共通の所見をまとめるならば、

- (一) 何れも平安初期に稀で、平安中期から興ること。
- (二) 訓点資料・平仮名文資料両者で並立すること。
- (三) 奈良時代からの連続した伝統の後裔とは考へにくいこと。

(四) 平仮名資料から訓点資料への影響があつたことも考へられること。

等とならう。そして、訓点資料の中で、これらの現象が比較的早く現れる文献を見ると、古文尚書古点・漢書楊雄傳天曆点などの博士家関係のものや、天台宗関係と認められるものが大部分を占めてゐるといふことが注意される。既に、天台宗↓博士家の関係は、先学の指摘される所であり、又、博士家点本に平仮名字体の多用されることも、小林芳規博士の説かれる所である。私は更に加へて、この系列の中に於て、平仮名文との間に何等かの殊に親密な関係があつて、仮名字母の点でも、交流が存

したのではないかと、推測するのである。

四

上掲の平安時代の諸文献の中に使用された仮名字体の字母（「第3表に掲げたもの」の中で、上代の文献に見出されないものを拾って行くと、次のやうなものがある。

イ	意	訓注類		
美			竟宴和歌	
キ	只	典籍本文		
喜		典籍本文		
起			竟宴和歌	草仮名文
畿			竟宴和歌	
ケ	奇	典籍本文		
サ	斜		竟宴和歌	草仮名文
シ	砂		竟宴和歌	
私			竟宴和歌	
ソ	處			草仮名文
楚			竟宴和歌	
ト	東	訓注類		
二	弭	典籍本文	竟宴和歌	平仮名 草仮名文

ニ	兒		竟宴和歌	草仮名文
ネ	子	訓点	典籍本文	
然			竟宴和歌	
ノ	農		竟宴和歌	草仮名文
濃			竟宴和歌	
ハ	皮	訓注類		
盤			平仮名復期 草仮名文	
頗			平仮名復期 草仮名文	
フ	婦		平仮名(後期)	
ホ	奉	訓注類		
江	商		竟宴和歌	
ラ	蘿		竟宴和歌	
朗			竟宴和歌	
レ	麗		竟宴和歌	

これらの中で、訓点資料に見えるのは「子」(平位のもので、訓点資料には、新奇なものだけと存し兼ねることが知られる。訓注類、典籍本文、並に平仮名文にも、同じやうに新出のものは僅であり、新出の大部分は、日本紀
竟宴和歌と草仮名文(秋萩帖・銚色紙)に集中してゐる
ことが注意される。日本紀竟宴和歌は、意圖的に日本書

記の中の仮名の難字を模倣してゐることは顕著であつて、
 婀娜 歛 俄 嘉 枳 著 玖 俣 矩 鷄 胡 舉
 など、極めて例が多いが、それと併せて、新しい、字画
 の多い字を多く採用してゐること、右に掲げた通りであ
 る。これは故意に奇字を用ゐて、表記上の装飾を凝さう
 とした意識の表れであるに違いない。又、秋萩帖、継色
 紙などにも、類似の意図が見られることも、右の表によ
 り明に知られるが、それらの中で、竟寧和教と共通した
 字母が、

起 斜 東 兒 表

などのやうに見えてゐるのは、興味あることと言へよう。
 そして、更に注意されることは、これら平安時代新出
 の字母による、草仮名、及び平仮名が、所謂「変体仮名」
 として、平安後半期以降、中世より近世・現代に及びま
 で、永く一般に使用されて行つたといふ事実であり、そ
 れら諸字母は、平安初期には未だ存せず、平安中期以降
 に新に生じたものであること、そして又、それらの中の
 幾つかのものは、訓点資料の世界とも縁があつて、片仮
 名の字母として、後まで広く行はれたものもあつたが、
 大部分の新字母は、訓点資料の世界の片仮名とは別であ

り、片仮名の字母にはならなかつたといふ事実である。

五

平安後期から院政期、更に中世以降に下つての
 時代における片仮名字体は、さほど大きな幅や変遷は見
 られぬとはいへ、尚、種々の問題を含んでゐるし、又、
 同じ時期における平仮名の字母の変遷については、未だ
 殆ど検討された例を見ない。これらは何れも、仮名の研
 究の新生面として、今後に残された課題であると思ふ。

この小論は、この点に關する問題提起として、平安初期
 ・中期を中心として、卑見を述べたものであるが、各位
 の御批正を賜うは、幸の至りである。(五四・二・一〇)

(注)(一) 中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」

六二五頁。

(二) 注(一) 文献四三九頁以下。

(三) 小林芳規「平安鎌倉漢籍訓讀の國語史的研究」
時代に於ける 七二七頁以下。

〔附記〕本稿は昭和五十三年五月二十六日の訓点語学
 会講演会に於て發表した内容に基き、全面的に改補
 して書下したものである。